

蕾の悦虐（ロリマゾ）番外編

僕はパパの牝奴隷



濠門長恭

目次

1. ナツキ売ります - 3 -
2. 初めての調教..... - 37 -
3. 女の子特訓とマゾ牝調教
4. 偽りの性同一性障害

後書き

1. ナツキ売ります

「綾香は浮気相手ではない。単なるSMのパートナーだ」

「そのほうが、よっぽど悪いじゃないですか！」

「結婚したとたんプレイを拒絶したおまえに、どうこう言われる筋合いはない」

リビングでは修羅場が始まっている。僕は自分の部屋から盗み聞き。無線LAN経由なんて、セキュリティ対策が甘いんだよ、ママ。

そう、盗聴器を仕掛けたのはママ。三か月前に省エネとか言い出して、家じゅうの照明器具をLEDに替えた。無駄づかいをしょっちゅうパパに叱られてるママが、だよ。

なんかきな臭いと思って調べたら、案の定だった。●学一年生でも、ITリテラシーはママよりもパパよりも高いんだから。

「おまえこそ、誰の種とも知れぬ子を押つけたくせに」

ええっ……！ それ、僕のこと？

「血液型はABOだけではない。俺はNでお

まえはM。それなのに、長^{なつき}月はMMだ。あり得ない」

あれだ。四月に、家族そろって健康診断とかで。そのときにわかったんだとすると、パパは七か月も悩んでいたことになる。

なんて考えてるあいだも修羅場が続いてて。「出て行け！ 即刻、離婚だ」

ついにパパが伝家の宝刀を引き抜いた——なんて、おチャラケてる場合じゃない。

「慰謝料？ ふざけるな。こっちから請求したいくらいだ。しかし、裁判になれば長月も真実を知る」

「あいつは渡さん。おまえを憎むように教育して、いずれ財産を継いでもおまえのためにはビター文使わせない」

そんなことをしなくても、僕はじゅうぶんにママが嫌いだし、パパが大好きだよ。

ママが泣き出して、パパは押し黙る。

「わかりました。出て行けばいいいでしょ！」

ママのヒステリックな声を最後に、リビングは静かになった。

あまりの出来事に呆然自失しながら、同時に、整理がつかないくらい、いろんな考えが

押し寄せてきた。

ママ、無一文で追い出されて、どうするのかな。僕はママは嫌いだけど憎んではないから、心配してしまう。

ママの実家はパパが援助してたくらいだし。P Cが使えなきゃ事務員も無理だし。

まだ三十二だから、熟女ソープとかデリヘルは、ありだよな（スーパーのおばさんになってるママは、想像できなかった）。

ママのことより、僕自身のこと。ママを憎むように教育するってことは、これまでよりずっと甘やかしてくれる？

僕は『S L S M』ってフォルダにある画像や動画のことを考えた。パパのP Cの奥深く隠されていたフォルダ。

「パパ、パソコン終わったよ」

「そうか」

僕の目の前でログオンし直すから、パスワードもU A Cも無意味。パパのいないときに、こっそり。

パパだって男なんだから、エッチな画像とか隠してるかなって。拡張子で検索して。

そりゃあ、ショックだったよ。●校生くら

いのお姉さんが三角木馬に乗せられて一本鞭で叩かれてる動画とか。まだ毛も生えていない一本筋の女の子が、トゲの生えた針金でぐるぐる巻きにされて血まみれになってる画像とか。でも、もっとショックだったのは。僕と同じ年くらいの男の子が、二人のおとなの男の人にサンドイッチにされてる画像。男にも使える穴が二つあるくらい、ネットでR18サイトを見ていれば覚える。

犯されてるのが男の子だったからショックを受けたんじゃない。お尻を犯してる男の人の腰には、ホクロがオリオン星座みたいに並んでた。パパの腰にあるのと同じのが。

ホクロだけなら、ものすごい偶然ってことも……あるかなあ？　だけど、メタボとは無縁の筋肉質の体格。画面の外にある顔はきっと四角くて、その中には意志の強そうな濃い眉と真一文字の唇があるはずだ。

絶対にパパだと確信できる画像や動画は、ほかにもあった。パパが虐めている相手は、女の子も男の子もいた。

だから、お手伝いのアヤさん（三十歳）がパートナーだというのは意外な盲点だった。

パパが実はサディストでロリコンでショタコンだと知っても、僕はパパのことを嫌いにならなかった。そして、パパに虐められている子に嫉妬した。だって……どんなにうらやましくても、親子でそういう関係って、さすがに無理だよな。

だけど——僕は、パパの子じゃなかった。僕にも、パパに虐めてもらう資格(?)があったんだ。パパのフォルダにある子たちは、とくに男の子は、華奢な感じで顔もかわいい。僕も、ママにばかり似た女顔だってよく言われるから、ストライクゾーンだよな？

そんなことを考えているうちに(途中でちょろちょろっと眠ったかもしれないけど)夜が明けた。

十一月だというのに冷房全開みたいな空気の中で朝ご飯を食べて、学校へ行って、帰ったときには、ママの姿がなかった——のは、珍しいことじゃないんだけど。ふだんはアヤさんのほうから、ママがどこへ行ったか、いつごろ帰るかを教えてくれるのに、今日はなにも言わない——のは、珍しい。

アヤさんは、晩ご飯(あとでレンチン)の準備

備をして、いつもと同じ午後四時に帰って行った。

一時間後にパパが帰宅。ものすごく簡単に事情を説明してくれた！

「ママはずっと浮気をしていた。だから、離婚した。長月はパパと暮らすことになった」

浮気というのは、僕の出生にかかわる問題のことじゃないと思う。文化サークルとかP T Aの分科会とか学生時代の女の子グループで旅行とか、●三歳（と二か月）の僕にすら男の影ってやつが見えてしまう。パパも当然気づいてたはず。

昨夜のケンカでパパがそのことを言わなかったのは――核兵器を使う前に空爆なんかする必要がないからだろう。

その夜も、僕はなかなか寝つけなかった。

パパにアヌス（とマウス）を犯されて、縛られたり鞭打たれたりしたいなんて、僕はアブノーマルなんだと、真面目に悩んだ。

違う。パパにじゃなくて、強い人に、そうされたいんだ。強い人には支配され、弱い者は支配したくなるのが、人間の本能だと思う。だから、『弱きを助け強きをくじく』なんて嘘

っぽい標語が作られたんだ。『おなか为空いたらご飯をたべましょう』なんてわかりきったことは、誰も言わない。

僕の場合は（そしてパパも）その支配の中にセックスが含まれているだけなんだ。性的少数者かもしれないけど、けっして異常者じゃない。

そんなことを考えながら、いつのまにか朝になっていて。そして、僕の決心は固まっていた。

いつもの午後五時にパパが帰宅したとき、僕はいつもと違って玄関口で出迎えた。それも、きちんと正座して。

「お帰りなさい」

「ただいま。どうした、なにかおねだりか？」

「ええと……」

頭の中でセリフを再確認。パパがどう反応するか予測できないから、途中からアドリブだけど。

「ごめんなさい。パパとママの言い争いを盗み聞きしました。だから、僕がパパのほんとの子じゃないって知っています」

「……………」

パパがほんとうに困っているという顔を、僕は生まれて初めて見た。

「もうひとつ、ごめんなさい。パパのパソコンにある『SLSM』ってフォルダの中身を見てしまいました。オリオン星座みたいな腰のホクロも」

パパ、すごく気まずそうな顔で、僕から目をそらした。

「だから……」

目をそらしたまま、パパは固まってる。僕が逃げると思ってるんだろう。

ここから先はすごく言いにくい。言ってしまうと、引き返せなくなる。でも、勇気を出さなくちゃ。

「だから、僕を買ってください。そのお金を、ママにあげてください。僕は……あの画像みたいなことをされてもいいです」

言っちゃった。自分で自分を人身売買。僕はパパに虐めて——じゃなくて、サディスティックにわいがってもらえるし、ママは路頭に迷わなくてすむし、パパは専用のショタを手に入れられる、一石三鳥。

パパの顔がどう変わったか、僕にはわから

ない。恥ずかしさと恐怖とちよっぴりの期待とで、うつむいてしまったから。

長い長い長い長い沈黙。それから、パパがしゃがれた声で。

「本気で言っているのか？」

「はい」

僕は即答。

馬鹿なことを考えるな、とかお説教されるかも——というのは、杞憂だった。

「それなら、ちゃんと土下座してお願いしなさい」

叱られるときよりも、ずっと厳しいパパの声。パパの心の中にあるSスイッチがはいったんだらう。

そして、僕もMスイッチがオン。

僕は廊下に頭をこすりつけた。

「どうか、僕を買ってください」

パパは黙って玄関を上がって——僕の頭を踏みつけた。

「ケツ穴にチ●ポを突っ込むだけじゃないぞ。何日も寝込むほど鞭打ったり、気絶するまで水に沈めたり、禪一本で雪山登山をさせるかもしれんぞ」

胸の奥が、きゅうんって締めつけられた。最後のは、つらいだけじゃなくて恥ずかしい。「はい。パパの好きなように扱ってください」パパの足が、頭からどいた。

「それなら、おまえに買う価値があるか品定めしてやる。素っ裸になれ」

僕は立って、シャツとズボンを脱いだ。それから、ちょっとだけ勇気を出してブリーフも脱いだ。パパの前で裸になるのは、三年ぶりくらいかな。

素っ裸だから、靴下も脱いだ。裸ソックスは萌えだそうだけど、たしかに全裸よりも恥ずかしい。

「前を隠すな」

僕は『気をつけ』の姿勢。好きな女の子と二人きりになったときより緊張した。胸はドキドキ、頭はクラクラ。告白した（速攻の即行で振られた）ときと違うのは、ペニスまで緊張してきたってところ。

「生意気なものが生えてきたな」

まだ黒い産毛くらいだけど、ちらほら発毛が始まっている。それをパパは指に絡めて、プチッと引き抜いた。

「い……」

痛いと言いかけて、がまんした。これくらいで泣きを入れてちゃ、パパの購買意欲がわからないよね。それとも逆かな。

パパが僕のペニスをつかんだ。人差し指と中指で皮をめくり上げて、親指の腹で先端をぐりぐりこすった。

どくんどくと、血管が破裂しそうなくらい、ペニスが硬くなって脈打っている。

「精通はあったのか？」

シチュエーションがこれだから、セイツウは漢字変換しなくてもわかる。

「うん。今年の七月に、股のあいだに挟んで海老反りしたとき」

聞かれていないことまで言ってしまった。でも、実は自縛遊びをしたときだったとまでは白状しない。

「オナニーは毎日か？」

していて当然のように質問する。しているけど。

「三日に一回くらい……パパ、もうやめて。出ちゃう！」

ペニスの付け根のもうすこし奥のあたりに、

塊りのような感覚が込み上げてくる。

パパは、すぐ手をはなしてくれた。それが僕のMスイッチを入れっぱなしにしておく作戦だったと理解したのは二日後。何度も射精させられて、それでも責め続けられるつらさを知ってからだった。

「おまえを買うかどうかよりも――盗み聞きと覗き見のお仕置きが先だな」

パパは僕をユーティリティルームへ連れて行った。窓のない物置部屋。断舍離ブームが終わるころに、パパがあれもこれもそれも捨てて、ほとんど空っぽ。

パパは上着を脱いで。部屋の隅に丸めてあった縄で僕の手首を縛った。照明器具を取り付ける金具に縄の端を通して、僕の腕を引っ張り上げた。それから、壁に立てかけてあった家具転倒防止の突っ張り棒を床に置いて、その両端に僕の足首を結びつけた。

脚立までさり気なく置いてあるし。もしかして、ここはアヤさんとのプレイルーム？

パパがベルトを引き抜いた。それはズボン脱ぐためじゃなくて。

「鞭を受けるのは初めてだろうな」

「もちろんだよ」

ぱしん。

正面からベルトで、すくい上げるように叩かれた。ごく軽い叩き方だったんだらうけど、突っ張り棒で大きく開かされた股間だったから。

「ぐうううう……痛い！」

こう丸が吊り上って、悶絶しそうな痛さだった。ケンケンしたくても、身動きが取れない。

「言葉づかいに気をつけろ。マナーの悪い奴隷はいらない」

「はい、パパ。ごめんなさい」

返事が出来るようになったのは、三十秒くらいしてからだった。

パパが僕の後ろへまわった。いよいよお仕置きだ。

「いくぞ」

ひゅん、パシン！

声と同時にベルトが風を切って、僕のお尻に当たった。痛いけれど、じゅうぶんに耐えられる。というか、清々しい痛さだった。

ひゅんっ、パシイン！

ビュンッ、バッチイン！

一発ごとに強くなってくる。むしろ、それで僕は安心した。僕がどこまで耐えられるか確認しながら、パパは叩いている。

もう、清々しいなんて言っているどころじゃなくなってきたけど、強く叩かれれば叩かれるほど、僕のペニスは硬くなっていく。

後ろからも、それが見えたんだろう。二十発くらいで、パパは叩くのをやめた。僕の横に一メートルくらいはなれて立った。

「言っておくが、おれは『満足のM』なんかに用はない」

初めて聞く言葉だけど、意味はなんとなくわかる。そして、買ってもらえないのかなと、不安になった。

「とはいえ、まったく素質のない子をいたぶる趣味もない」

パパの言っていることが、よくわからない。

ビュン、バッチイン！

まだ斜め上を向いていたペニスを打ち下ろされた。

「くう……」

お尻よりずっと痛かったけど、こう丸みた

いに悶絶はしなかった。

「おまえのようなマゾを、本気で泣き喚かせるのが、俺の好みなんだよ」

だから、本物の体罰や調教は、こんな生易しいものではない。それは覚悟しておけと脅された。

「なにをされてもいいです。どうか、僕を買ってください」

「車よりも高い買い物だからな。乗り心地を試してから決める」

今度は、じゅうぶんに意味がわかった。

僕は縄をほどかれて――寝室じゃなくてバスルームへ連れて行かれた。

裸になったパパを見て、ちょっとがっかり。フランクフルトソーセージよりも太くて完全に剥けているペニスは、ぴくりとも頭をもたげてない。

「四つん這いになれ」

今頃になって気づいたけど、パパは完全に命令口調。

はいつて返事をして、タイルの上に膝と手を突いた。

パパはシャワーのヘッドを分解して、ホー

スの先を僕のお尻（正確にはアヌス）に突きつけた。

アナルセックスの前には、腸の中を洗っておかないとうんちが着く——くらいは、パパのPCで（ごめんなさい）R18サイトを見て知っている。

だけど、知識と実体験は大違い。

ぐぼぼぼぼって、音というか振動がお腹に響いて、冷たい水がはいってきた。お腹が突っ張って気持ちが悪いくけど、妊婦さんみたいにお腹が膨らんできても、そんなに苦しくはない。でも、水が止まった瞬間から、うんち（というか水？）が漏れそうになった。

「トイレに行ってもいいですか」

「駄目だ。がまんできなければ、浴槽の中でしろ」

恥ずかしいけど、がまんしろと言われるより、ずっといい。

僕は立ち上がろうとしてバランスを崩した。お腹の水のせいだ。縁につかまってバスタブをまたぐとき、パパが肩と腰を支えてくれた。バスタブにしゃがんだ瞬間。

ぶしゃああああああっ！

派手な音とともに、アヌスから水がほとぼりした。水がはね返って、僕の胸のあたりまで汚れた。当然、バスタブも茶色く染まった。

十秒か二十秒くらいで激しい噴水は終わっても。

びちびち……びち。

パッキンのゆるんだ水道みたいに水が漏れ続けた。

パパがシャワーのホースで汚れた身体に湯を掛けてくれた。僕がバスタブから出ると、バスタブも湯で流した。もしもトイレでしていたら、掃除が大変だったろう。

僕は、また四つん這いになって水浣腸をされて。今度は、あまりバスタブが汚れなかった。三度目は無色透明の水になった。

僕はパパのベッドルームではなくママの寝室へ連れて行かれた。パパとママは、三年くらい前から別の部屋で寝ているんだ。セックスレスの仮面夫婦だね。

パパのは新婚当時から使っている古いダブルベッドで、ママのは新しいけどシングル。

そのシングルベッドの掛け布団を裏返した上に、あお向けに寝かされた。

パパが足首をつかんで、僕の脚をVの字に開いて二つ折りにした。そして、股間に顔を近づける。

「皺が規則正しく並んだアヌスだ。これなら、おまえもあまり痛くないだろう」

ほめ言葉かな。

パパは、透明な小瓶にはいった粘っこい液体を指に塗った。アナルセックスの必需品、ローションだ。

「ひゃ……」

予測して覚悟していても、指でアヌスをつつかれて、女の子みたいな声を出してしまった。

「感度もいいな」

からかわれてるのかほめられてるのか、わからない。

くにくにとアヌスの表面をマッサージされてから。つぷっと指が侵入してきた。

「……………」

自分で指や（小さな）ドライバーの柄を挿入したときとは、感じがまるで違う。Hなことをするんじゃなくてされるのって、すごくHだ。ペニスが痛いくらいに勃起してる。

僕の反応を見て、だいじょうぶとパパは判断したんだろう。指が二本になった。ドライバーの柄より苦しい。

「痛いっ……！」

アヌスが引きつれる痛みがあった。口をイーッと指で引っ張る痛みの上位バージョン。その痛みが回転してる感じ。もしかして、チョコキを作って回してる？

「パパ、それ……痛い」

「なんだ、もうギブアップか？」

つまらなさそうな声。

そうだ、これは試乗会だった。乗り心地が良いって、思ってもらわなくちゃ。

「だいじょうぶ……でもないけど。僕がどんなに痛がっても、パパのしたいように扱ってください」

とんでもないことを言っちゃった。でも、このセリフ。これから何度も繰り返すような予感がしてる。

「いい心がけだ。ちょっとだけ褒美をやろう」

パパは指を一本にしてくれた。そして、手の平でこう丸を押し上げながら、深くまで入れてきた。

お腹を内側からくすぐられているような感覚があつて。

「あっ……」

こりこりっと、どこかを突かれるというか転がされて。ペニスを刺激されてもいないのに、射精しそうになった。その瞬間。

指の刺激がなくなって、ぎゅっとペニスの根元をつかまれた。ので、暴発させずにすんだ。

「だいぶんやわらかくなったな。いよいよ、長月の初めてをもらおうぞ」

「はい……僕のアナルバーจินをパパに捧げます」

もう、MスイッチもHスイッチもはいりっぱなし。

パパが僕におおいかぶさってくる。パパのペニスもフル勃起してる。フランクフルトより太くて長くて、サラミソーセージみたいにゴツゴツしてる。

(絶対に無理……！)

自信を持って断言できる。サラミソーセージ一度チャレンジして、あまりの痛さにあきらめたことがあるから。それよりも太いフラ

ンクフルトなんて、無理の2乗。

僕は足の甲がマットにつくまで深く二つ折りにされて、自然とお尻が浮いた。その中心へ……太くて硬くて熱いペニスが押しつけられた。

「んんんんん……！」

重くて大きな痛みが、アヌスの一点だけでなくお尻全体に広がる。最初にドライバーを挿れたときも、そうだった。今度のほうが百倍は痛いけど。

「はああ、はああ、はああ……」

僕は、素早く息を吸い込んで口を大きく開けてゆっくりと息を吐き出した。ウェブで覚えた呼吸法。

「ふふん。そこらの売り専小僧より、よっぽどうまいじゃないか」

何度目かに息を吐き出し始めたとき。

「はあ……あ！ あがあ！」

重くて大きな痛みが、鋭い激痛に変わった。と同時に、ずぐぐぐっと、アヌスが震えるのがわかった。パパのペニスが穴を強引にこじ開けて侵入して来たんだ。

「あああああっ……」

肺から空気が全部出たあとも、苦しくて息が吸えない。

ずぐぐぐぐぐ……パパの剛毛が僕の肌を突き刺すまで、パパが腰を沈めてくる。まるで焼けた鉄の棒を突き刺されてるみたいに、痛くて熱い。

それから。ずぬううっと引き抜かれるのがわかった。すこし楽になった。アヌスは排泄器官だから、一方通行の構造になっているのかな。

「ふひゅう……」

空気をむさぼって、喉が鳴った。

それから。またパパがゆっくりと突き入れてきて、僕は自然と息を吐き出す。その動きが、何回も繰り返された。それに合わせて、僕も息を吐いて吸った。

「これは何十分でも続けていられるが……最初だから、さっさと埒を明けてやる」

「はああ……はい。ありがとうございます」

心の底からの感謝だった。

「これまでより苦しいが、しばらくがまんしろ」

パパは身体を起こしたので、ペニスが抜け

かかる。エラの張っている部分がアヌスをいっそう押し広げて。でも抜かずにまた突き入れてくる。ヒップホップよりも速いテンポで小刻みに。

「は、は、は、は……」

僕の息もアップテンポ。息をしてるんだか途切れ途切れの悲鳴なんだか、自分でもわからない。

そのうちに息ができなくなって、天井がぐるぐる回り出して——不意に、ぐううっと奥まで突き入れられた。

パパのペニスが、びゆくびゆくって痙攣するのをアヌスに感じた。中に出されたって感覚はなかったけど。

パパがベッドから下りた。いつ抜かれたのか、わからなかった。

アヌスには、まだ鋭い激痛が残っている。

「おまえのケツマ●コは、なかなかの名器だ」

間違いなくほめられてるんだし、願いもかなったんだし——でも、あまりうれしくないのは、なぜなんだろう。

「しかも、本物のマゾだ」

それは、どうかな。同い年くらいまでの女

の子は、虐めたやりたいと思ってるんだから。

「気に入った。おまえを買ってやる」

うれしいというよりも。これからは、あの動画みたいなことをされるんだと思うと、胸がきゅうっと締めつけられた。そして、ペニスの付け根のもっと奥のあたりが、じいんと痺れてくる。

「落ち着いたら、身体を洗ってから書斎へ来なさい」

パパは僕をほったからして、ママの寝室から出て行った。

あお向けに寝ていると、ベルトで叩かれたお尻の痛みが甦ってきた。アヌスも、まだ悲鳴をあげている。それなのに、僕のペニスはまた勃起してきた。ので、身体を起こして。

パパが自分のではなくてママのベッドを使ったわけがわかった。薄い血が、あちこちにじんでいる。最後のほうはずいぶん強く叩かれたし。ベルトは縁が鋭いから。肌が破れたんだ。

念のため、アヌスに触れてみたけど、出血はしていなかった。でも、透明なゼリーみたいなのが指に付いた。正体不明だから、ちょ

っぴり不安。

もう、このベッドが使われることはない。それとも、僕はこの部屋で調教されることになるのかな。ユーティリティルームが拷問部屋で、ここがセックス調教の場。なんて、僕が決めることじゃないんだから。

——シャワーで身体を洗っているときも、胸がきゅんとして、下半身がじいんとしてた。まだ服を着ちゃいけないだろうと考えて、全裸で書斎へ。

「そこへ座りなさい」

父親が息子に話しかけているような言い方だけど、有無を言わせない響きを感じられた。

書斎の床に正座した僕の前に、印字された紙を挟んだクリップボードとボールペンが置かれた。

「それを読んで、承知ならサインしなさい」

紙の一行目には、20ポイントくらいで『人身売買契約書』と書かれていた。

人身売買契約書

売主津田長月（以下「甲」）は、買主津田武

志（以下「乙」）と、つぎのとおり売買契約（以下「本契約」）を締結した。

商品の特定

甲の肉体および一切の人的権利。

引渡の時期

本契約の締結と同時とする。

売買代金

壱阡七百七拾伍萬円とする。

支払の時期と方法

津田知美（以下「丙」）が本契約を了承したときに、乙より丙に現金手交とする。

乙は丙に本契約を了承させる義務を負う。

特約事項

甲が●八歳に達した時点で、相続財産の遺留分の放棄と引き換えに、甲は返品を受ける。

この特約は、乙が甲を他者に転売したときにも引き継がれるものとする。

「千七百……」

僕は、まず金額に驚いた。百万円じゃ安すぎるし、五百万円はふっかけ過ぎかな。そんな●学生の金銭感覚とは桁が違っていた。

パパの仕事は経営コンサルタントで、働く

時間は自分で決められるし、ローンがどうこうなんて話を聞いたこともないし、わりと裕福なんだなとは思っていたけど、実はすごいお金持ちだったんだ。

「おまえが●八歳になるまで千七百五十五日ある。一日一万円だ」

二十四で割れば、時給四百円ちょっとで最低賃金の半分以下。NG無しの真正マゾ女のレンタル料はひと晩が十万円。それに比べれば安いものだ——と、パパは言うけど。それは数字のマジックだ。二十四時間責め続けられるわけじゃないし、四十歳のパパが僕を毎晩かわいがってくれるとも思えない。

特約事項のところが意味不明。●八歳になったら解放してくれるってことだろう。転売ってのが不気味だけど。

僕は契約書の最後にあるパパのサインの隣に署名をして、朱肉で拇印をおした。

「これは自分で書き写しなさい」

クリップボードが白紙に差し替えられて、新しい文書が絨毯の上に置かれた。

僕は、それも最初から最後までよく読んで。それから、まだ習っていない漢字も間違えな

いように気をつけて書き写して——それでも、五分とかからなかった。だって、これだけだよ。

奴隷誓約書

津田長月（以下、ナツキ）は津田武志様（以下、お父様）のマゾ牝奴隷としてお仕えすることを誓います。

一、ナツキは、お父様のご命令には喜んで無条件で服従致します。

一、ナツキは、お父様の許可なく食餌・排泄・射精・睡眠を致しません。

ウェブで見かける（ええい、この目年増！）誓約書って、項目がもっとたくさんある。家では裸で過ごしますとか、いつでも肉便器として使ってくださいとか、ほかの人に貸し出されてもかまいませんとか。

考えてみたら。売買契約書で一切の権利を放棄してるし。命令に無条件で服従するって項目に、あらゆる内容が含まれている。

でも、大きな疑問がひとつあった。マゾ牝

奴隷——牝？　メスって読むよね。オスは牡のはず。字が間違ってるって指摘しようかと思ったけど、男の娘ってこともあるから、黙ってた。

書き写して、僕だけの署名と拇印。

最後に、パパだけの署名があるプリントを渡された。

「参考までに読んでおきなさい」

読んで、さすがに不安になった。

奴隷調教方針

津田武志（以下「主人」）は情熱と性欲のすべてを傾けて、津田長月（以下「奴隷」）をマゾ牝奴隷に調教する。

A：主人は、奴隷の健康管理に留意する。

とくに、A I D SをはじめとするS T D感染は防止に努める。

ただし、女性ホルモンその他の投与による副作用は例外とする。

B：主人は、奴隷に回復不可能な肉体的損傷を与えないように留意する。

ただし、以下は例外とする。

脂肪吸引および移植
頭髪以外の永久脱毛
ピアス
非露出部への入墨および焼印

女性ホルモン。やっぱり、パパは僕を男の娘にするつもりなんだ。でも、回復不能な肉体的損傷はNGだから、性転換手術をされるわけじゃないと、安心した。

安心していいのかな？ この方針って『留意する』『務める』だもの。気をつけたけど駄目だったよ、ごめんな。パパは、そんな無責任じゃない。これは僕への脅しというか、主人と奴隷の立場の違いを教えるため——だと、信じたい。

そうして、売買契約が成立して。僕はパパ（じゃなくてお父様）のマゾ牝奴隷になった——はずだったけど。

「すっかり遅くなったな。晩ご飯にしよう」
思いっきり、ずっこけた。最初の命令が、それ？

僕は、裸のままでテーブルについて。腫れたお尻が座面にこすれて、ちょっと痛い。そ

して、すごい違和感。人身売買だのマゾ牝奴隷だのいっても、結局は本物の虐待じゃなくて、SMプレイなんだなと思う。そりゃまあ、●三歳の男の子とアナルセックスをするってのは立派に性的虐待なんだろうけど。なんて戸惑っていると。

「それが、人間として最後の食事だ。心して食べなさい」

そう言われて、ちょっとスイッチがはいりかけた。そういえば、奴隷誓約書には『食餌』って書いたよね。

「はい。いただきます」

けど、まあ。感慨とかはなかった。アヤさんの料理は、いつもと同じでおいしかった。

食事が終わると、すぐ自分の部屋へ行かされた。僕は奴隷であると同時に、ふつうの●学生でもあるわけで。宿題とか、自主的な勉強とか。

それが終わったら、いつもならリビングへ行行ってテレビを観る（家でのゲームは禁止されてる）ところだけど、奴隷の身分にはふさわしくないような気がして。文字どおりに全裸待機。

お父様は、九時過ぎに僕の部屋へ来た。

「マゾ牝奴隷としての作法は明日から仕込んでやる」

そう言って、作法以前の心がけというのを教わった。

まず、一人称代名詞は使わない。自分のことは、ナツキまたはナツと言う。

「俺をどう呼ぶかは、もうわかっているな？」

「はい、お父様です」

「そうだ。そして、必ず敬語を使え。それから、アヤのことは『お姉様』と呼ぶのだ」

「はい」

アヤさんは年齢が上の男性に対してはマゾだけれど、女性や男の子に対してはサディスティンになるんだそうだ。

「俺が不在のときは、アヤの命令に従え」

つまり、調教師ってことかな。

あとは、その命令への従い方。

一切の質問が禁止。質問するのは、納得できなければ従わないという意味だそうだ。

もちろん「いやです」「できません」なんて反抗を意味する言葉は、使っただけで厳罰。

調教やお仕置きが辛いときは、お慈悲を

願ってもかまわない。ただし、許してもらえるととは限らない。

「限界の手前で泣きを入れたと判断したら、もっと厳しくするからな」

どうしても許してほしいときは、ひとつだけ方法がある。今受けている責めより厳しい別の責めをお願いすればいいんだそうだ。でも、鞭打ちと水責めと、どっちが厳しいかなんてわからないよね。

「射精禁止は、自分で誓約したな？」

「はい……」

「夢精もだぞ」

そんな無茶な——と、思った。明日の朝には、本物の体罰が待っているかも。だって、この四日間はオナニーどころじゃなくて、記録更新中だもの。

「夢精できないようにしてやる」

お父様は僕をベッドに寝かせると。こう丸を指ではじいて、勃起しかけてるペニスを寝かせつけてから、皮を内側に巻き込んでペニスを身体の奥まで押し込んだ。そして、瞬間接着剤で皮を固めてしまった。しかも、その上に玉袋をかぶせて接着して、ガムテープま

で貼り付けた。

「これで夢精の心配はなくなったな」

「はい、ありがとうございます」

お父様が部屋から出て行って。

もう勉強を続ける気にもなれなくて。二日続けて寝不足なので、そのまま寝ようとしたけれど。股間に意識が集中して目がさえる。身動きすると、一緒に接着された毛が引っ張られて微妙に痛い。ペニスに悪戯をされてるって考えが、つぎからつぎへと妄想を呼び起こす。

そして、やっと眠ってもペニスが猛烈に痛くなって飛び起きる。寝ているあいだにペニスは勃起したり縮んだりするっていうけど、ほんとうだった。

2. 初めての調教

目覚ましより一時間も早く、パパじゃなく
てお父様に起こされた。

「これで剥して身体をちゃんと洗ってから、
ダイニングへ来なさい。もちろん、裸だぞ」

小さな金属缶には『剥離液』って書いてあ
る。

Mスイッチがオフだったから、ガムテープ
を剥すときに毛が引っ張られてすごく痛かつ
た。バスルームで剥離液を使って、玉袋を剥
してペニスの包皮も元に戻して。もう膀胱の
限界だったから、十年ぶりくらいに、バスル
ームでおしっこ。

ダイニングキッチンでは、お父様は新聞を
読みながら食事を始めていた。予告されてい
たとおり、僕の『人間としての食事』は用意
されていない。

「そこに正座しろ」

さっきとは違って、いかにもご主人様らし
い声。SスイッチがONだね。

ちゃんと膝をそろえて座ったら。

「そうじゃない。踵を立てた上に尻を乗せろ。脚は直角に開け」

このポーズ、かなり恥ずかしい。勃起しても隠せないし。

「そうだ。これがマゾ牝奴隷の正座だぞ」

お父様が正面に立って、開脚の股間越しに爪先でアヌスをつついた。僕が女の子だったら、もっと恥ずかしい所を、もっと奥深くまでつつかれたんだらうな。

お父様はテーブルに戻って、自分で焼いた目玉泣きをパンに乗せてかじってから。ペッと僕の前に吐き出した。

「食え」

そうか、これが奴隷の食餌なんだ。お父様が噛み砕いてくださった物をいただけるなんて、感謝しなくちゃならない。

言われなくても、僕は土下座みたいに顔を床に近づけて犬食い。それが、正解だったみたい。今度は、ばさっとマカロニサラダ（コンビニで売ってるやつ）を床に落としてくださった。

いつもの三分の一くらいの食餌が終わると。「念の為だ。下痢止めを吞んでおけ」

錠剤と水のはいったコップを渡された。奴隷の健康維持に留意してるってことだね。

「服を着てもいいぞ。早く学校へ行け」

いつもより三十分も早く家を出た。お尻はもう痛くなかったけど、股間がヒリヒリするので、ゆっくり歩いてたら。

「おはよーす」

どんっと肩を叩かれた。叩いたやつは、ものすごい早足で僕を追い抜いていった。あいつ、誰だっけ。思い出せないし、思い出してもしょうがない。

そのうち、身体が地面にめり込んでくみたいな錯覚に襲われた。睡眠不足のせいかな。

「どした？ 気分でも悪いのか？」

声をかけられて。ええと、誰だっけ。たしか……隣の席のジュウセイだ。

「あ……なんでもない」

「そうか。急がないと遅刻するぞ」

ジュウセイも倍速で走り去った——んじゃなくて、僕の歩き方が極端に遅くなってる。

どうにか間に合ったみたいで、気がついたら、ちゃんと自分の席に座ってた。

「起立、礼」

そして一時限目が終わった——てくらい、授業内容を覚えてなかった。

「今日のナツちゃん、変だぞ。保健室で休めよ」

女の子みたいな呼び方をするなど、いつもみたいにツッコむ気力もない。自分でも、どこかおかしいと思うのだけど、保健室へ行くのが面倒くさい。

「なんでもない」

朝ご飯をあまり食べていないのに、食事をするのも面倒で、給食もほとんど残した。

そして気がいたら、家に帰っていた。制服のまま、ベッドに倒れ込んで。

「いつまで寝ているつもり？ さっさと起きなさい」

頬を叩かれてというより、きついビンタを張られて目が覚めた。

窓から陽が差し込んでいる。夕方から朝まで、ずっと眠っていたらしい。昨日とは違って、気分爽快。

「え……？」

疑問と驚きとで、僕はがばっと起き上がった

た。

今日は、たしか土曜日。アヤさんは休みのはず。

うん、声はアヤさんなんだけど。スツピンのお団子ヘアじゃなくて、髪を下ろして濃い目のメイク。まったくの別人、きつい印象の美人。服装もセーターとジーンズじゃなくて、胸元が深くえぐれた黒のミニワンピース。「家の中でも服を着ているなんて、何様のつもり？」

そうだった。僕はマゾ牝奴隷で、お父様だけでなく、アヤさんじゃなくてお姉様の命令にも従うんだ——と、そういう目で見直すと。まったくの女王様に見えた。

「はい、ごめんなさい」

僕は立ち上がって、制服を脱いだのだけど。裸を異性に見られるのは、女の子じゃなくても恥ずかしい。

ピシッと手の甲を鞭で叩かれた。細いプラスチックの棒で先がドングリみたいになっている、教鞭ってやつ。

叩かれた理由は明白だったから、僕は急いで全裸になった。前を隠すと叱られると思っ

たので、気をつけの姿勢。Mスイッチははいってるんだけど、ペニスもまだ恥ずかしがってる。

そこを、お姉様が教鞭でつつく。

「マゾの心構えができてないわね。犬だって、うれしいときは尻尾を振るでしょ」

その意味はわかったし、物理的な刺激も加わったので。たちまちフル勃起。

「おっ勃てても皮かむりなのね。それはそれで遊べるんだけど」

これを着けていなさいって、お姉様に猫の首輪みたいなのを渡された。まさかリストバンドじゃないだろうから。玉袋とペニスをひとまとめにして革バンドを巻いた。

「向きが逆」

留め金を下に回して、きつく締めるように言われた。上になった側には、小さな金属環が着いている。そこに細い鎖を自分でつないだ。

ここまで、お姉様は鞭でつつくだけで、僕の身体には(ビンタを除いて)触れていない。こういう調教もあるんだ。

お姉様に鎖を引っ張られて、洗面所へ。

「今日のところは人間扱いしてあげる」

勃起しているのに、便座を上げたトイレにうつ伏せになって、おしっこをさせられた。玉袋が便器の底に当たるし、おしっこが身体にはね返るし、じゅうぶんに非人間的な扱いだと思う。それから、やっぱり便座を上げたまま座って、うんち。朝起きてすぐに全部出す習慣がついているんだけど、戸を開けっぱなしでお姉様に見られていたから、なかなか出なかった。

シャワーで冷水を浴びせられて。それから（身体を拭いた後で）、後ろ手に手錠を掛けられた。輪の部分がファーで包まれているプレイグズで、本気になったら引き千切れるかもしれない。だけど、自分でほどけない後ろ手の拘束は、生まれて初めての経験。

「おまえ、うれしそうね？」

うれしくはないけど、ほっとした気分。だって、手が自由なのに前を隠さずにいるってのは、自分から見せびらかしてるみたいで恥ずかしい。拘束されたら、前を隠せなくても当然なんだって、安心できる。そのことを説明すると。

「面白いことを言うわね。恥ずかしいことをするのは恥ずかしくて、恥ずかしいことをされるのは恥ずかしくないのね」

ちょっと違うと思う。

まあ、いいわ——と、お姉様は僕をリビングへ引き立てた。

「旦那様に朝のご挨拶をするのよ」

「あ、はい。おはようございます、お父様」

「そうじゃないわよ」

お姉様に言われて、僕は膝立ちになった。

そのお父様が僕の前に仁王立ちになって。ナイトガウンのすそを左右に広げて、水平くらいに勃起したペニスを突きつけた。間近で見ると、すごい迫力。こんな大きな（フル勃起したら、もっと大きい？）物体が、おとついは僕のアヌスを貫いたんだと、感動してしまった。

「なにボケッとしてるの？ 早くオチ●ポ様にご挨拶しなさい」

うわあ、すごい卑わい——というより、吹きだしそうになる言い方。だけど、同じ器官でも自分のとお父様のとでは身分（？）が違うって意識が生まれる。

なにを求められてるか理解したので。僕は生まれて初めて、他人のペニスを口にくわえた（自分のペニスだって、くわえたことはないけど）。

生臭くてしょっぱいけど、体温が同じくらいだから異物感はなくて。キュロンっとした感触。

「作法とかテクニックは、いずれ教えてやる。今は、歯を立てないことにだけ気をつけろ」

そう言うと、お父様は両手で僕の髪の毛をつかんだ。そして、僕の頭を前後に激しく揺すぶり始めた。揺すぶりながら、喉の奥にまで突き入れる。

「うぶうぶ、う……」

頭がくらくらするし、吐き気が込み上げてくる。

「口を開けるんじゃない。しっかり閉じていろ」

口の中でパパじゃなくてお父様のオチ●ポ様がひとまわり大きくなった。喉の奥を突かれるだけじゃなくて、上顎をこすられる。

それが延々と続いて。

「息を止めろ。吐き出さずに飲め」

ビュクビュクってオチ●ポ様が痙攣すると、喉の奥に液体が叩きつけられた。息を止めるのが間に合ったので、むせたりはしなかったけど、喉がすごくいがらっぽい。

オチ●ポ様が抜かれると、口の中いっぱい精液があふれた感じになった。プール開きのときと同じ臭いが鼻の奥に広がる。えぐみがある。飲みこもうとしたけど、喉にへばり着いて、うまくいかなかった。ので、唾を溜めては飲みこむのを何度も繰り返した。

「初めてにしては上出来だったぞ。とっておきの褒美をやる」

また、ママの寝室へ連れて行かれて。シーツがくしゃくしゃになったまま放置されてるベッドに、大の字に縛りつけられた。

「今日は、回数制限無しで射精させてやる」

でも、どうやって？ 手は使えないし、あお向けだからベッドにこすりつけることもできない。

アヤさんが服を脱ぎ始めた。背中ファスナーを下ろして、ミニワンピースを脱いで。僕に正面を向いたまま、腕を後ろにまわしてブラジャーをはずして。記憶にある（という

ことは、五年以上も前) ママのおっぱいより大きくて張りのある乳房が、ぽろんとこぼれるんじゃないなくて、どーんと突き出る。

「見てるだけで出ちゃいそう？」

お姉様はストリッパーみたいに腰をくねらせながら、お尻にちょこんと引っ掛かっているショーツをじわじわとずり下げてった。

そして一転。ベッドに上がって、僕をまたいで膝立ち。画像ではなくリアル3Dの女性器が、僕の目の前。へアーは小さなハート形が割れ目のてっぺんにあるだけだから、クリトリスも小淫唇も(その奥まで)丸見え。

「ナツキの初めて、もらっちゃうわね」

「……………！」

お父様の言葉の意味がわかった。逆レイプ。それとも、筆おろし？

もう、僕のペニスは爆発しそう。

お姉様は、お腹に貼り付いている僕のペニスを握ると、ぎゅっと押し下げて垂直に立てて、その上に腰を落としてきた。

ぬぶっと……温かくてやわらかくてきつく締めつけてくる肉の穴にペニスが押し入る感触は、オナニーとは次元が違った。

「あっ……」

挿入が終わる前に、僕は暴発させてしまった。でも、いちおうは中出しで。やっぱり、ちゃんとした初体験だよね——なんて考えてから。この一部始終をお父様に見られてたって気づいて。

恥ずかしさと照れくささと。でも、なんとなく胸に甘い感傷が広がった。僕のすべてを、お父様の前に晒け出したんだ。

「どうだ、男になった感想は？」

「気持ちよかったです」

としか言えなかった。

ふふんと、お父様が唇だけで笑った。

「では、つぎはマゾ牝にしてやろう。アヤ、まかせたぞ」

「はい、旦那様」

そう言って、お父様は部屋から出て行った。

そうだった。僕はマゾ牝奴隷に調教されるんだ。女性ホルモンを投与されて、男の娘になるんだ。もしかして、副作用で射精できなくなる？

とすると、これは最後のお慈悲？

こんな快感を教えられて、すぐ奪われるな

んて。

それでもかまわないという思いも、すこしあった。どんなにMスイッチがはいっていても、射精と同時に賢者モードに突入する。だけど女性は、いつまでも快感が続くという。僕って、ほんとに耳年増目年増頭年増だ。

「さあ、今日は忙しいわよ」

お姉様が縄をほどいてくれて。股間につながった鎖に引かれて、僕はダイニングキッチンへ行った。

「今日から、おまえの餌はこれに入れるのよ」

床に置かれたのは、直径二十センチくらいの、ドッグフードを入れる金属の皿。本物のドッグフード、カリカリが山盛りにされた。

食べてみると、まずくはなかった。ちょっと生臭いし、ちょっと粉っぽいけど、なんていうのかな。ナチュラルでワイルドな味？甘ったるくも塩辛くもなく、パリパリ歯ごたえもある。ペット用の餌には食品添加物が含まれてないって、ネットで見た記憶もある。

鶏の頭を丸ごととかはいやだけどな——なんて、それを期待してみたりするくらいに、Mスイッチがはいりかけてた。

でも、それなりに食欲が満たされると、Mスイッチが切れちゃう。性欲と食欲は反比例するって、やっぱりネットの生かじり。なので。

「これを着るのよ」

渡された服には抵抗を感じた。十一月なのに上がTシャツ一枚というのは、まあ寒いだけでファッションとしてはあり（かなあ？）だけど。女の子が穿くみたいなの、ローウエストで股の切れ上がったデニムパンツというかホットパンツは、ふだん穿いてるブリーフより小さい。でも、はみパンの心配はない。直穿きだから。

拒否は厳罰なので。股間を猫の首輪で締めつけたままホットパンツを穿くと、ペニスと玉袋がきゅうきゅうに締めつけられた。足回りは、スニーカー。

お父様の車（三台あるうちの、いちばん小さな）で、お姉様と二人で外出。

最初の目的地は（固有名詞は伏せておくね）ジェンダークリニック。僕には説明もなく注射されたのが、たぶん女性ホルモン。となりの薬局で飲み薬をもらって。

つぎがエステサロン。僕ひとりだけ一番奥の部屋へ案内されて。中には、三人の女性が待ちかまえていた。お姉様よりちょい年上で『manager みいな』って名札をつけた人と、ずっと若い『chief ちあき』さんと『staff りほ』さん。

「着ているものを全部脱ぎなさい」

いきなり言われた。

「事情は知ってるわ。いい子にしてないと、綾香にチクるからね」

とうぜん、それがお父様に伝わって、本物の体罰。

僕はすぐ全裸になった。お姉様に裸を見られるのは、お父様に見られるよりずっと恥ずかしかったけど、今はその三倍も恥ずかしい。ペニスもすごく緊張してる。

「あらら。男の子って、わかりやすいわね」

みいなさんに言われて猫の首輪もはずして。

脚を乗せる台が左右に付いてるベッドに、両手をバンザイした形で寝かされた。

「レーザー脱毛が一般的だけど、ボクちゃんには特別に電気脱毛をしてあげる。毛穴に針を刺して電気で完全に毛根を焼くのよ。時間

がにかかるし、とても痛いわよ」

この人もサディスチンだ。

動かれると手元が狂うからと、革ベルトで拘束された。手首と胸と腰と膝と足首。

部屋の隅にあった機械が僕を取り囲んだ。

「ほかの部屋ではふつうのお客様が施術中だから、静かにしててもらわないと困るのよ」

ボールギャグを口に噛まされた。息をする穴があいてないゴム球で、舌を押さえる突起までついてる。つまり、悲鳴をあげるくらい痛いってことだ。

みいなさんが小さなL字形の器具を持って、僕の横に立った。器具の先端は鋭い針になっていて、反対の端からは電線が機械につながっている。ちあきさんとりほさんは、頭を挟んで両側に立った。両腋と股間を一度に脱毛されるんだ。

「ふつうのお客様に施術するときは麻酔軟膏を塗るのだけれど、マゾのボクちゃんは痛いのが好きよね？」

僕は、頭を縦にも横にも振らなかった。痛いのが好きなんじゃない。そういうシチュエーションに興奮するんだ。どう違うかときか

れても、うまく説明できない。なんて考えるとき。

チクッと刺された。注射ほども痛くない。

「むぶっ……」

電気を流されると、注射よりずっと痛かった。でも、不意打ちだから声が出ただけで。チクツの後にドカンが来るとわかっていたら、全然平気——だと思ったけど。

「ぶ、ううっ……」

下腹部と両腋を微妙な時間差でやられると、不意打ちの連続で呻いてしまう。

「のびちゃうなんて、だらしのないわね」

しぼんだペニスを指ではじかれた。

「これは、特別サービス」

ペニスの根元に針を刺されて通電された。

「むぶううっ！」

「まだ効き目が無いわね。亀頭に刺してあげようか？」

僕はぶんぶんと首を横に振った。拒否は厳罰だけど、とにかく今は許してほしかった。

みいなさんは、ふふんと笑って、脱毛作業を再開した。

施術は二時間くらい続いた。三人とも真剣

な表情。額に汗をかいてる。僕は額どころか、全身に脂汗。

「まだ産毛だけど、脛も軽く処置しとこうか」
ガムテープ（よりもやわらかい）みたいなものを貼られて、ベリベリッと剥された。何百本もの毛を一気に引き抜かれるんだから、呻くほどじゃないけど痛かった。

拘束から解放されて。大きな鏡の前に立つと、細い毛がまだたくさん残ってた。V I Oラインだけで十万本以上の毛があるから、何度も通院する必要があるんだそう。つまり。また恥ずかしい姿で拘束されて、痛い目にあわされる——そう考えたら、勃起してきた。

「あとのことがあるから、ちょっと除毛しとこうか」

股間全体にテープを貼られて、また引き剥された。あっという間にツルツルじゃなくてブツブツザラザラの肌になった。こんなに簡単にすむんなら、この二時間はなんだったんだと思って。そうか、テープで除毛したところは、また生えてくるんだった。

「うすみっともない姿になったわね」

みいなさんに呼ばれて部屋にはいつてきた

お姉様が、僕の股間を見てあざ笑った。

「ちゃんと尻尾を振ってるのは関心よ」
勃起のことを言ってる。

「だけど、今はちょっと都合が悪いの」
僕は床にあお向けに寝かされた。

「ふふふーん♪」

お姉様は鼻歌を歌いながら、スリッパを履いたまま僕のペニスを踏んづけた。

「今日は何発出してもいいのよ」

ぐうっと体重を乗せて、お腹の上でペニスをこねくる。前後にしごいたり左右に転がしたり。

「うわあ、かわいそう」

「顔をまっ赤にしてる。かわいい」

ちあきさんとりほさんが笑ってる。みいなさんは、冷たい目で薄笑い。

四人の女性に虐められてるって、すごく屈辱的ですがすごく興奮する。それに、自分で布団にこすりつけるより、ずっと刺激が強い。ので、あっさりと発射してしまった。

お姉様が向きを変えて、僕の顔にスリッパの裏を押しつけた。

「自分で出したんだから、自分で始末するの

よ」

不潔だと思ったし、Mスイッチが切れちゃったから、本気でいやだった。けれど、僕に拒否権はないので。スリッパの裏にべっとりついてる自分の精液をなめた。お父様の精液より、ずっと粘っこかった。

身体を起こして、蒸しタオルで自分の身体を拭いて。また鏡の前に立たされた。

「粗チンをお腹にくっつけて、自分で持ってなさい」

お父様のペニスはオチ●ポ様で、僕のは粗チン。ちゃんと覚えなくちゃ。

お姉様は後ろから抱きつく形になって、両手で僕の鼠蹊部をさぐった。骨や筋肉をぐりぐりえぐられて痛かった。

「これなら、だいじょうぶそうね」

お姉様はこう丸の片方を指の先でぐっと押し上げた。

「痛い……！」

蹴られたときと同じくらいの痛さだった。けれど、痛みはすぐに消えた。反対側のこう丸も、同じようにされて。

「さわってごらん」

え……？　こう丸がなくなってる！

「身体の中に入れたのよ。ケンケンをすれば元に戻るわ」

ケンケンどころか、おもいきり垂直にジャンプして、わざと膝を曲げないでガツンと着地しないとこう丸は出てこなかった。

ちゃんと出し入れできるのを確かめてから、また押し込まれた。

それから、ペニスを下向きにというか後ろに引っ張られて、皮だけになった玉袋で左右から包んだ。その合わせ目に瞬間接着剤を流し込まれて、テープで仮止めされて。

五分後にテープを剥すと、鏡には女の子が映っていた。毛が生えてなくて、具もはみ出していない完全に一本筋の股間。もちろん胸はぺったんこだから、背丈を別にすれば小さな女の子そのもの。

「わあ、かわいい」

「超マジック！」

「タックというテクニックよ」

それまでずっと黙って見ていたみいなさんが、ちあきさんとりほさん（と、僕）に解説してくれた。

「わたしも、実物を見たのは、これが初めて」

「外出するときは、必ずこうするのよ」

お姉様に宣告されて、不安になった。

「学校へ行くときもですか？」

「例外は無し」

「でも……トイレとかは？」

お父様に瞬間接着剤でペニスを封印されたのを、僕は思い出していた。

「四つん這いになってごらん」

わけがわからなかったけど、ちゃんと質問抜きで命令に服従した。

お姉様がみいなさんから細長い棒を借りて、僕の股間を後ろからつついた。

棒はペニスの先っぽに当たった。

「最後の部分は接着してないから、ちゃんと排泄できるわ」

女の子と同じように便器に座って、女の子と同じように紙で拭かなくちゃならないんだろうな。

「これを穿きなさい」

ポケットティッシュみたいな物を渡された。ちまちまっと折りたたまれた女性用のショーツだった。女の子の下着って、こんなに小さ

くなるんだ。広げても、ブリーフの半分も面積がない。

腰までゴムを引っ張り上げられなくて、お尻の途中で止まった。くすぐったくて、今にもずり落ちそうな心細さ。

「それから、これ」

デニム生地の一—ミニスカート。膝上三十センチくらい。

ブラジャーも着けさせられた。おとなの女性が着けてるエロっぽいじゃなくて、胸全体を包むようになってる。ファーストブラってやつかな。乳房が当たる部分は、ふんわりした厚手の生地が二重になってるから、Tシャツを着たらすこしだけ胸に膨らみができる。

髪は長めにしてるから、ぎりぎり女の子に見えなくもない——と、自分を納得させる。きっと、この格好で外を歩かされるから、ひと目で女装子と見破られるのは恥ずかしい。

コインパーキングまで五分ほど歩いて。何人もの男性に振り返られた。けど、視線の先はお姉様。ボンキュッボンで、胸元ぱっくりで、生脚ずどーんだもの、僕だってちらちら盗み見してる。

これで家に帰れると思ったら、美容院へ連れて行かれた。

「ここは、ごく普通の美容院だから言動に気をつけるのよ」

どう気をつければいいのか、わからないんだけど。

「島崎綾香です」

「初めてと承っていますが、本日はどのように？」

「お願いしたいのは、こっちの子です。できるだけフェミニンに仕上げてください」

「……？」

受付の女性が、疑わしそうな目で僕をじろじろ見た。

ちょんちょんとお尻をつつかれた。自分でうまく説明しろってことかな。でも、まさかマゾ牝奴隷になりたいんですなんて言えないし。

「あの……小学校からずっと、男の子みたいな格好してたんですけど。ええと……気になる男の子がいて。女の子らしく変身したいなって。でも、恥ずかしいから遠くまで来ました」

うわあ。我ながらすごい創作力。ショーツとかブラを意識していると、自然と女の子みたいなしゃべり方になる。声変わりは始まりかけてるけど、自分で言うまでクラスメートも気づかなかったくらいだから、だいじょうぶだと思う。

「ほんとうに、ボーイッシュだね」

奥から、お父様よりちょっと若いくらいの男性が出て来た。

「ずっと、床屋さんでしてもらってたから」

大きな嘘の中の、ちっちゃな真実。

「うん、なんとかなるよ。僕が担当してあげよう。床屋さんに行ってたのなら、男性でも平気だね？」

そして一時間後。まるきり女の子の顔が鏡に映ってた。大きくいじったわけでもパーマをかけたわけでもない。前髪をまっすぐに垂らして、おでこがちょうど隠れる長さにカットして、全体をブローでふんわりさせて、毛先を内側にカールさせただけで、大変身。

すごく華奢な印象。こういう女の子には、Sスイッチがはいっちゃう。裸にして縄で縛って……ええい、なに考えてんだ、ナツキ。

「気に入ってもらえたかな？」

耳元でたずねられて、我にかえった。

「え？ あ、はい。すごく素敵です」

うっとりした声で答えちゃうんだから、重症だね。

「さすがにお腹がすいたわね」

言われて気づいたけど、午後二時を過ぎてる。

お姉様はバーガーショップの駐車場に車を入れた。

店内でも、男性の視線がこっちに集中。今度は、僕にも何割か来ているのがわかる。

「なにを食べたいの？」

「え、いいんですか？」

これからはずっと、ドッグフードとか残飯だと思っていたから、びっくり。

「ふふ……これも調教のうちよ」

ということで。レディース・ランチセットを持ってテーブル席へ。

「こら。人前ではきちんと脚を閉じてなさい」

小さな声でささやかれた。

そうだ。今はミニスカートだった。あわて

て脚を閉じ合わせる。いつもなら内腿を押し返してくる存在がなくなっているの、ちっとも窮屈じゃない。玉袋に包まれているペニスがちょっとだけ圧迫されて――腰をくねらせたなら気持ちいいかもしれないけど、もちろん人前でそんなはしたない真似はしなかった。

膝を立てずに脚を横に流す。肘は身体にくっつける。大口を開けない。女の子って、覚えなければならぬマナーがすごく多い。のは、もしかするとお姉様の流儀？ 夏の暑いときなんか、脚を広げて下敷きでスカートの中を扇いでた女の子だっていたんだもの。

マナーにばかり気をつけてたので、初めて食べたレディースセットの味は、ちっともわからなかった（どうせ、同じハンバーガーだけどね）。

僕が大変身した以上の大改造が、家でも始まっていた。この家は、裏庭がすごく広い。四人くらい子供ができるとか、実家の両親（つまり、僕の祖父母）と暮らすとかなったら建て増す予定だったんだそうだけど、どっちも

実現しなくて。

その裏庭が掘り返されて、コンクリートブロックも並べられている。

「ここはね、ダンスのレッスン場になるの。大音量で音楽をかけてもいいように防音完備で、すぐ汗を流せるようにシャワーとトイレも付けるそうよ」

レッスンを受けるのは僕。鞭の振り付けに合わせて大声で歌って踊らされるんだ。

それにしても、お父様の行動力はすごい。僕を買ったのがおとついの夕方で、今日はもう拷問部屋の工事が始まっている。きっと、何百万円もお金を使ったんだろうな。僕の代金と合わせて二千万円以上。高い買い物をしたとお父様を後悔させないように、頑張らなくちゃ。

だけど、どうすればお父様は喜んでくれるんだろう。本気で泣き喚かせるって、言った。つまり僕は——もう耐えられないってところまでがまんしなくちゃならないんだろうな。それとも、自分で厳しい拷問を考えて、それをおねだりすればいいんだろうか。

その答えは、もう準備されていた。

「思っていたよりも、うまく化けたな」

お父様はほめてくださった——のだと思う。

「いずれはアヤとレズらせてやるが、今日のところは牡突きさせてやる」

僕は変身の魔法をとかれて(全裸に戻って、タックも剥して)。お姉様も裸になった。パパだけが部屋着。そして、三人でママの寝室へ。

ベッドは朝のままで、シーツからは異臭が漂ってきそうだったけど、アヤさんは平然とあお向けに寝転がった。枕を敷いて腰を突き出し、脚を開いて膝を立てた。

「今度は、ナツキが上になるのよ」

また、お父様の目の前でセックスをさせられる——させてもらえるんだ。

タックされてるあいだはおとなしくしてて、解除してからも手持ち無沙汰にしたペニスが、たちまち硬くそびえ立った。

僕もベッドに上がって、お姉様の脚のあいだに身体を入れて。ぬらぬらしてる小淫唇(ほんと、肉ひだそのものだ)を左手で左右に広げて、右手でペニスを握って突っ込んで。穴の位置がわかるかなと不安だったけど、吸い込まれるように挿入できた。

最初るときとは違って、やわらかく締めつけてくる穴に押し入っていく快感を味わうくらいの余裕はあった。下腹部と下腹部が密着するまで挿入してしまうと快感が薄れるので、ピストン運動をするのは男の本能だね。浅くとかゆっくりとか考えずに、本能にまかせてガシガシ突いたら、五回目くらいで腰の奥からペニスの先端まで（そんな感じだった）精液が突き抜けた。

「はい、おしまい」

冷静な声とともに、僕は突き飛ばされた。

お姉様はそのまま起き上がって僕に後ろ手錠を掛けた。朝と違って、金属が剥き出しのごつい手錠だった。

バスルームへ連れて行かれて、お姉様の前に正座させられた。脚を直角に開いてお尻を踵に乗せる座り方。

お姉様は立ったままで股間を洗った。息ができないくらい、僕の顔に水がかかる。

お姉様のシャワーが終わると、僕は後ろ手錠のまま、バスタブの中で四つん這いにさせられた。四つん這いというんだらうか？ 膝と肩で体を支えてお尻を高く突き出した、ヨ

ガにありそうなポーズ。

足を折り曲げて、足首と太腿を一緒に縛られたので、自分では身体を起こせなくなった。すごくいやな予感がする。でも、質問は禁じられている。

バスタブの縁にさえぎられて、お姉様の姿が見えなくなった。カシャカシャと、シャワーヘッドを分解しているらしい音。なにをしているか見えないと、時間がすごく長く感じられる。

シャワー浣腸ってことは、お父様とアナルセックス。許してほしいなというのが、正直な気持ち。今は賢者タイム中で、HスイッチもMスイッチも切れている。

お姉様がバスタブを覗き込んだ。やっぱり、手にホースを持っている。ホースの先には、プラスチックの細い筒が取り付けられていた。「お風呂洗い用の高圧ノズルよ。これで腸壁にこびりついた宿便も洗い流してやるわ」

お姉様はノズルの先端を僕のアヌスに押しつけて――ずぶずぶっと突っ込んだ。

「痛い！」

ノズルはオチ●ポ様よりも細いけど、ロー

ション無しだから、すごく痛かった。

ノズルだけでなく、ホースの部分まで押し込まれたらしい（ノズルの付け根の太い部分が通過する激痛があった）。そして、腸の奥まで一直線に水が押し寄せてきた。

だんだんお腹が重たくなってくる。自分では見えないけど、この前と同じかそれ以上に膨らんでるんだろう。

水が止まると、ずるずるっとホースが引き抜かれた。

「すぐ出していいわよ」

僕はお姉様の言葉に逆らって、アヌスを締めめた。

「その前に――身体を起こしてください」

「なぜ、わざわざ縛ったと思っているの？ さっさと噴水を吹き上げなさい。自分の出した汚い物にまみれるのよ」

それは、絶対にいやだ。このままの姿勢で出したら、とんでもないことになる。

「お願いします。身体を起こしてください」

「ふうん。命令にそむくつもりね。いいわ、どこまで意地を張れるか、見ててあげる」

絶対に許してもらえないとわかったとたん

に、アヌスの力がゆるんだ。

びしゅううう……壁に当たった水がはね返って、全身を濡らす。バスタブの底を流れる汚水が、僕の顔のまわりを流れていく。

「これって、ぼ……ナツキが自分勝手なセックスをした罰なんですか？」

「おまえなんかとセックスをした覚えはないよ」

え……？

「朝のは、チェリーの初物食い。さっきのは、旦那様の命令でおまえに牝穴を使わせてやっただけ」

メスアナ———すごく卑わいな言い方だと思った。

「そんなことより。噴水は、もうおしまいみたいね」

またアヌスにノズルを突っ込まれた。今度はがまんせずに、すぐ出した。

お姉様がどう言おうと、これは罰だと思う。五回も噴水をさせられて、それから、溺れるんじゃないかってくらいたくさん水を浴びせられた。湯じゃなくて、十一月の冷たい水道水。

僕は身体も拭いてもらえず、ぐしょ濡れのままユーティリティルームへ（連れて行かれたなんて感じじゃなくて）連行された。お父様は、先に来ていた。

「せっかくのカールが台無しだな」

いつのまにか、部屋の壁には大きな鏡が取り付けられていた。それも、ドアを除いた三面に。

たしかに。べたっと貼りついた髪だと、ちっとも女の子には見えない。

「身体も拭かずに来たのか。廊下の掃除が大変だぞ」

「でも、それはアヤさんが……」

ぐぼっと、腹パンチ。

「うぐ……」

「言い訳をするな。おまえが廊下を汚したのは事実だ」

これって、本物の体罰を僕に与えるためのこじつけ……だよな。この部屋に連れて来られた以上、それは覚悟しなくちゃ。

「……ごめんなさい」

痛いのは（とくに賢者タイム中は）いやだから、素直にあやまった。

「それだけじゃなくて、お風呂場ではアヤの命令に反抗しましたわ」

最初の浣腸ですぐ出さなかったのは、バスルームを汚しちゃいけないって気配りでもあったんだけど。

「粗相と反抗か。極刑に値するな」

お父様が楽しそうに言った。

極刑って、新聞とかだと死刑の意味で使うよね。この場合は、どこまでなんだろう。

後ろ手錠に縄が通されて、照明器具のフックから吊られた。腕が引き上げられて、上体が前に傾く。自然とお尻が後ろへ突き出されて、鞭の標的になった。突っ張り棒で開脚させられたから身体が沈んで、肩が痛い。

「へたに暴れると肩を脱臼するぞ」

脅しじゃない。上体を起こそうとすると腕を上へ引っ張られる。もっと上体を倒せば手首が上がるから縄がゆるむはずなんだけど、前へ倒れそうになる。バランスを崩したら、全体重が肩にかかる。僕は、まったく身動きが取れない。

「今日は、ズボンの革バンドとはわけが違うぞ」

お父様が、極刑に使う鞭を僕に見せた。鞭——だろうか。太さが三ミリくらいの金属ワイヤー。長さは一メートル以上。先端には直径五ミリくらいの玉（魚釣りで使う錘？）がかぶさっている。こんなので叩かれたら、肌が裂けるくらいじゃすまない。

カチカチカチカチ……歯が震えるのを止められない。

「いくぞ」

ひゅ、ビチイ！

革のベルトより風切音はずっと小さいけれど、ずっと痛かった。横一文字の赤い筋が刻まれたお尻が、鏡に映ってる。出血してるよ！

ひゅ、ビチイ！

お父様は鞭を叩きつけてるんじゃない。腕を横に振り抜いて、肌の上で鞭を滑らせている。ワイヤーは表面がささくれているから、肌が裂けて当然だった。

「まだまだ余裕のようだな」

「そんなことはないです。必死でがまんしてるんです」

「口答えをしたな」

ひゅん、ビシッ！

「あうっ……！」

今度は斜めに叩かれた。鞭が滑らずに、お尻をひしゃげさせた。肌を切り裂かれはしなかったけど、ずっと太い筋が刻まれた。

「まさか、これしきで音を上げたりはしないだろうな？」

「はい、だいじょうぶです」

「では、もっと強くしてやろう」

ぶんっ、バシイン！

「痛いっ！」

ひどいよ。どう返事をしてもらってもいっそう厳しくされる。返事をしなかったら、それも反抗的とか言われるだろうし。

ぶんっ、バヂイイン！

「うああっ！」

また、肌が切り裂かれた。

二回三回と肌を切り裂かれて、それから立て続けに五発くらい、腕を振り抜かない叩き方をされた。そのたびに、僕は悲鳴をあげてしまった。

「どうした。元気がないな」

お父様が前にまわって来て、僕のペニスを握った。こんなに痛いMスイッチなんかは

いらなくて、真冬に裸で外へ出たときみたいに縮こまっている。

「心棒を入れてやろう」

お父様は僕のペニスを引っ張って伸ばすと、そこにワイヤー鞭の先端を押しつけた。玉になっている部分が、おしっこの出る穴（尿道口だっけ？）を押し広げる。

「まさか、それを入れたりはしないよね？」

「言葉づかいに気をつけろ」

言いなおしているひまはなかった。玉がつぶっとペニスの中に消えて。

「ひいいいっ……痛い、痛い！」

玉を押し込まれたあとのほうが痛かった。ペニスを内側から切られているような、鋭い激痛。

「こうしたら、もっと痛いぞ」

お父様はワイヤーの途中をつまんで、指をすり合わせた。

ワイヤーがペニスの中で回転して、それまでとは比べものにならないくらいの痛みが、ペニスから脳天まで突き抜けた。

「痛い！ 許してください。ペニ……粗チンを叩かれてもいいです」

それくらいじゃ追いつかない。

「こう丸を叩かれてもいいです。だから、これだけは……ぎひいっ！」

鞭が回転しながら、お父様がつまんでいるところまで一気に押し込まれて、目の前がまっ赤に染まった。

「痛い！ お願いしますから、許してください」

涙がこぼれる。泣くのは、これが初めてだった。

お父様は、僕がどんなにお願いしても許してくれず、どんどん鞭を突っ込み続けた。

「膀胱に届いたな」

そう言ってお父様が手を止めたとき、これで終わったと思って僕はほっとした。

終わっていなかった。

お父様はペニスの外に残っている鞭を小さな輪にして、ほどけないように縄で縛った。

そして、手をはなした。

「ぎひいいいいい！」

鞭の重みで、ずるずると抜けていく。突っ込まれたときより、ずっと痛い。ささくれが釣り針みたいに突き刺さってるんだろう。

コトンと鞭が床に落ちると、ペニスの先から血がしたたった。焼けた鉄棒を押し込まれているような激痛が、まだ続いている。

「せっかく心棒を通してやったのに、抜けてしまったな」

最初から、こうするのが目的だったくせに。

髪から垂れる水と涙とで、僕の顔はぐしゃぐしゃになっている。

「では、裏から活をいれてやろう」

お父様が僕のアヌスにローションを塗り込めた。お尻を突き出しているから、鞭で叩くだけでなく、立ったままアナルを犯すのにも（お父様にとっては）便利な姿勢だ。

お父様は僕の腰をつかんで、最初るときよりも無雑作に、後ろからアヌスにオチ●ポ様を挿入した。ほぐしてもらっていないので、アヌスが悲鳴をあげた。

お父様がピストン運動を始めると、身体が前後に揺すぶられて、肩がきしんだ。

でも、どちらの痛みもペニスほどじゃない。

お父様は、角度を変えながら浅く深く強く弱く突いてくる。アヌスの近くをお腹の内側から突かれたとき。さわられてもいないのに、

ペニスがちょっぴり頭をもたげた。

「アヤ。すこしだけこいつの身体を起こせ」

お姉様が脚立に上がって、腕を吊っている縄をほんとうにすこしだけゆるめてくれた。

自然と僕の身体が起きる。

オチ●ポ様が、アヌスに近いあたりを、ゆっくりと強く押し始めた。

すると、ペニスはまだまだあまり勃起していないのに、付け根の奥に塊りのような感覚が押し寄せてきて。

「い、痛い……」

傷ついた尿道が押し広げられる鋭い痛みとともに、先っぽから数滴の精液がしたたった。

それをお父様が指ですくって、僕の唇に塗りつけた。

「たったこれだけか。若いのにだらしない」

だって、四回目だよ。それに、お姉様の中に出してから一時間と経っていないし。

「どうだ。もう許してほしいか？」

不意にお父様が、優しい声でたずねてくれた。

「はい。どうか、お願いします。もう許してください」

演技とかじゃなくて、お父様の言葉にすがりつくような弱々しい声だった。

「粗チンをおっ立ててみる。そうしたら許してやる」

そんなの無理に決まってる。百メートルを十秒で走れと言われるより絶望的だ。

「それまでは、ずっと鞭だ」

お父様はまた後ろにまわって、また僕のアヌスにオチ●ポ様を入れた。さっきとは違って、激しく突いては思いきり引き抜く。それも急ピッチで。

「痛い、痛い、痛いです。お願いします。せめて、もっとゆっくりにしてください」

ひと突きごとに大きく身体が揺すぶられて、肩に激痛が走る。

「マゾ牝奴隷の分際で、俺に指図するつもりか？」

ますます激しく揺すぶられた。

でも、それはお慈悲だったのかもしれない。肩もアヌスもすごく痛かったけど、お父様はすぐに射精してくれた。

お父様も賢者タイムにはいってくれれば、もしかして休ませてくれるかな。なんてのは、

砂糖よりも甘い考えだった。

「おれは一服してくる。そのあいだは、おまえがかわいがってやれ」

お父様はお姉様にワイヤー鞭を渡して、部屋から出て行った。

お姉様は、裸じゃなかった。胸元から爪先までぴったり身体に貼りついた黒の網タイツ。全裸よりもHだ。そして、つま先立ちしてるみたいなハイヒール。もろ女王様ファッション。

「ふふふーん♪」

お姉様はエステサロンのときみたいに鼻歌を歌いながら、僕の腕を吊り上げている縄をぎりぎりまで短くした。

「旦那様は、お料理がからきしなの」

まるきり場違いの話——じゃなかった。

「片面だけ焼いても火がとおらないのを、ごぞんじないみたいね」

垂れていた鞭がはね上がって、胸を叩いた。

ひゅん、ビチイイイン！

「ぎひい……！」

ワイヤーのささくれが胸から腋まで引っ掻いた。

お姉様は、振り抜いた腕をそのまま下に振る。

ひゅん、ビチイイイン！

今度は腰を切り裂かれた。

鞭が三往復したら、お姉様は反対側へ移動して、また鞭を三往復させた。

「そろそろ勃起したかしら？」

お姉様は僕の背中に胸を乗せて、ペニスをまさぐった。

「い、痛いです。体重をかけないでください」

「そうよ。上になったときは体重をかけちゃ駄目なの。腕で支えるの」

お姉様がなんのことを言ってるのかわかった。やっぱり、僕のセックスの仕方がへたくそで、それで怒ってるんだ。

「あらま。赤ちゃんのオチンチンみたいになってる」

お姉様は僕の背中に思いきり体重をあずけながら、皮をつねった。

「また心棒を入れてあげようか。それとも、鞭でここに活を入れてほしいのかな？」

どっちも、絶対にいやだ。ペニスを叩かれるほうがましかもしれないけど、お姉様の手

元がすこしでも狂ったらこう丸直撃だ。

「黙ってちゃわからないわよ」

どっちもいやだけど、答えないと両方されるかもしれない。

「まあ、いいわ。答えるまで待っててあげる」

お姉様が、また僕の横に立った。

びゅうん、バッジイン！

「ぎゃはあっ……！」

悲鳴ではなく、吠え声だった。

鞭は吊られている腕をすり抜けて、背中に当たった。これまでよりも、ずっと痛い。たぶん、手加減なしだ。

バッジイン！ バッジイン！

悲鳴をあげる時間も与えられないほど連続して、身体じゅうを叩かれた。背中も腰も胸もお腹も。内腿を叩かれるのが、いちばん痛かった。玉袋をかすめるので、怖かった。

「それくらいで許してやれ」

いつのまにか戻っていたお父様が、声をかけてくれた。

「千七百七十五万円のオモチャだ。買ってすぐ壊しては、もったいない」

「一度おっしやったことを取り消すんです

か？」

それって、反論。だけど、お父様は叱らなかつた。つまり、お姉様は命令に絶対服従のマゾ牝奴隷じゃなくて、SMのパートナーってことなんだろう。

「ちゃんと勃起させてやるさ」

お父様は電気掃除機を持ち込んでいた。アタッチメントをはずしてホースだけにして、僕の股間に近づけた。

ブオオオオオオオオ……すぽん！

ウイイイイ……

ペニスと玉袋が吸い込まれてホースの口が肌に密着した。

お父様がホースを手前に引っ張る。

ズボッと大きな音を立てて玉袋がホースから引き抜かれた。でもペニスは中に残したまま、空気を吸い込み始めた。

ブボボボボボボ……

ペニスは勃起というよりも、真空で引き伸ばされてる。と同時に、強烈な空気の振動が伝わってくる。

尿道の痛みを忘れてしまうほどの快感だった。

「出、出る……」

HスイッチもMスイッチも関係なく、物理的な刺激だけで射精してしまった。

掃除機を止めて、お父様が皮をめくって尿道口を指でなぞった。

「雀の涙ほどだが、射精したな。勃起したと認めてやる」

「ありがとうございます」

僕をこんなひどい目にあわせた張本人に、僕は心の底から感謝した。

極刑が終わっても、後ろ手に吊り上げられたままだった。

「傷の手当てをしてやろう」

おしっこみたいな色の液体を、お父様が洗面器に入れた。容器のガラス瓶には『希ヨードチンキ』と書いてある。五百ミリリットル入りが二本、空になった。

「昔ながらの消毒薬だが、傷口には効果的だ」

お父様はゴム手袋をはめてから、洗面器の液体にひたしたタオルで僕の身体を拭き始めた。

痛い。沁みる。鞭の瞬間的な激痛とちがって、熱いのか冷たいのかはっきりしない痛み

が、じわじわと身体の奥に沁み込んでくる。

「くううう……」

傷口に効果的ってのは、こういう意味だったんだ。

お姉様も反対側で手伝い始めた。

あつというまに、僕の全身は黄色に染まった。

「粗チンの中も手当しなくてはな」

ふつうの三倍くらいの長さがある綿棒（綿も大きい）が液体に浸けられるのを、僕は震えながら見ているしかない。

お父様は僕のペニスをつかんで引き伸ばして。ずぶずぶっと綿棒を突き入れた。

「ぎひいいいいっ……！」

僕は、ワイヤー鞭を突っ込まれたときと同じくらいに甲高くて大きな悲鳴をあげた。

傷の手当てという口実の拷問が終わっても、ぼくはまだ吊られたままだった。

むしろ、これからが拷問だった。

「こんな身体で寝転がったら、床に染みがつく。今夜は、その格好で過ごせ」

吊るされてから二時間とは経っていない（と思う）。肩の痛みはますます強くなってい

るし、鏡に映った僕の手首は、手錠に圧迫されて紫色に変色している。このままひと晩放置されたら、回復不能な肉体的損傷を受けちゃう。奴隷調教方針に違反してる。

追加の体罰を覚悟で、それを言おうか迷っているうちに。上体をすこし起こせる（それでも三十度くらい）ところまで縄を伸ばしてくれた。肩の痛みが軽くなった。バランスを崩したら肩を脱臼する危険は残ってるし、強制開脚もそのままだけど。

お父様とお姉様は、ほんとうに僕ひとりを残して部屋から出て行った。照明も落とされて、豆電球だけになった。夜にはなっていないはずだけど、窓がないから見当がつかない。

肩が楽になったぶんだけ、尿道の焼けるような痛みと、全身にヨードチンキが沁みる刺激とを強く感じる。一年前（まだ●学生）の僕だったら、確実に泣き叫んでいる痛さだ。

とにかく、今夜ひと晩は耐えなくちゃならない。いや、あと千七百七十二日だ。

僕は初めて、自分をパパに売り渡したことを後悔した。わかってる。なにもせずにいるも、別の形でずっと後悔し続けたらどうって

ことは。

それに。●三歳（と二か月）で女性とのセックスを体験したなんて、これは勲章だと思う。アナルセックスも鞭打ちも、そういう趣味の人たち（僕も含めて）には、もっと大きな勲章だ。

今度こそほんとうに、まったく眠らずに朝を迎えた。朝だとわかったのは、開いたドアの向こうが陽の光で明るかったから。

お父様とお姉様のほかに、僕にはお爺さんとしか見えない小柄な人がいた。その人はお医者さんだった。

手錠をはずされて、僕は十何時間かぶりに吊り責めから解放された。

「これはまた、ひどく痛めつけたものですね。あなたの趣味ではないと思っていましたが」

立ったままの僕を、お医者さんはアルコールを浸した脱脂綿で拭き始めた。沁みるけど、これはほんとうの治療だ。

「いやいや。これが私の本性ですよ」

お父様が苦笑している。棘の生えた針金でぐるぐる巻きにされてる小さな女の子の画像

を隠し持ってるような人だもんね。

「たいていは、親に売られた子ですから。本気で拒絶する子を虐める趣味はないですね」

そこで、ちろっと僕の顔を見た。

僕としては、うつむくしかない。

「本人が希望しても、そういう場合は親バレを気づかうケースですしね」

本人が希望して（ないよ、夕べみたいなのは。でもあきらめてる）、保護者も納得してるケースなんて、まずありえないよね。

「しかし、この傷では学校を二週間は休ませねばなりませんよ」

「それも問題ないですね。両親の離婚にショックを受けた様子を、まわりに見せつけてあります」

金曜日の、あの地面に沈み込むような気分。もしかして、下痢止め（？）の薬と関係あるのかもしれない。

「二学期いっぱい休ませて、三学期からは転校させます」

私立校で、理事長がお父様の知り合いで無理を頼めるから、実際の通学は二年生になってからだ——と、お医者様ではなく僕を見な

がら言った。

「三学期で習うところは、ちゃんと自習しておけ。学校と同じテストで、平均点以下は厳罰だ」

夕べのは極刑。厳罰のほうが軽いことを祈ろう。もっとも、転校先のレベルが高くても平均点以上の自信はあった。今の学校では、体育実技以外はクラスのベスト10から落ちたことがない。

お医者さんは、尿道の中もアルコールで拭いてくれた。脱脂綿を巻きつけた細い医療器具は、綿棒よりもずっと楽だった。

化膿予防の抗生物質と麻酔剤を配合した軟膏を全身に塗りたくられて。紙おむつを穿かされて、包帯でミイラみたいにされた。

「明日には包帯を取ってもかまいません。ただし、皮膚に刺激を与えないようにしてください」

お医者様が帰って。ぼくも自分の部屋へ戻された。軟膏のおかげで全身から痛みが消えて――猛烈な眠気に襲われて、僕はベッドに倒れ込んだ。

麻酔軟膏の効き目が切れて身体じゅうが痛

くなってきたせいで、目が覚めた。もう夕方になっていた。

天井を眺めながら、いろいろなことを考えた。お父様にアヌスを捧げたこと、お姉様とセックスをしたこと、全身をズタボロにされた極刑のこと。

そのうち、奇妙なことに気づいた。もう一日ちかくおしっこをしていない。なのに、溜まってる感じがしない。

股間を手で押さえてみて、その理由がわかった。紙オムツが膨らんでぶよぶよしていた。小さな子供みたいに、おねしょをしちゃったんだ。それだけ深く眠ってたってことだ。

しばらくして、お父様が部屋へ来た。

「餌の時間だ」

ペット用の金属皿ではなく、お盆を学習机の上に置いた。

「身体を起こせるか？」

傷だらけでも、病人じゃないんだから……病人と同じだった。腰を曲げて腕をねじ上げられた姿勢でずっと立たされていたせいで、肩と腰が痛くて思うように動かせない。吊られていたときの苦痛に比べればどうってこと

ないけど、無理にでも動かそうという気力が湧いてこない。

「きょうのところは、甘やかしてやる」

お父様はお盆の皿から、なにかをつまんで口に入れた。それを何度か噛んでから、眠っているお姫様にキスする王子様みたいに、僕に顔を近づけて。指で僕の歯をこじ開けた。

お父様がしようとしていることがわかったので、僕は素直に口を開けた。汚いとは思わなかったし、いやでもなかった。むしろ、うれしかった。だって、お父様と間接（直接かな？）キスだよ。僕のファーストキスはオチ●ポ様に捧げたけど。

お父様の顔がぐうっと近づいてきて。やっぱり照れくさくて、目をつむっちゃった。

口移しされたのは、オムレツだった。（お手伝いさんとしての）アヤさんが作ったんだから、食べ慣れた味のはずだけど、ずっとおいしく感じられた。これは、お父様の愛情が調味料になってるんだ——と、信じたい。

愛情とは違うかもしれないけど。僕はお父様のマゾ牝奴隷。性欲の対象で加虐の対象でオモチャだ。それって、僕を嫌いじゃないし

憎んでもいないってことだと思う。

口移しで食べさせてくれたのは最初の三分の一くらいで、あとはスプーンだった。

お父様は部屋を出るとき、思い出したように言った。

「今日、あいつは金を受け取った。親権放棄の書類にもサインをした。これで、おまえは完全に俺の所有物になったぞ」

それを聞いて、なぜか僕の心は安らいだのだった。